
終わらない物語

黒猫。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わらない物語

【著者名】

Nマーク

N76790

【作者名】
黒猫。

【あらすじ】

世界が終わる、七日前

貴方なら、何ができる

目覚ましが鳴る。何時ものように止める。今日も何時もと何も変わらない朝だった。この日常が終わるまであと一週間。

のろのろと布団を出る。今日も朝は寒い。あの話が本当であるなら、もう僕は暖かい朝を迎えるのである。僕だけではない。この人類全員が、北半球に住んでいる人は夏を、南半球に住んでいる人は冬を、もう迎えられないのである。人類は、後七日後に滅亡するという予言の所為で。

そもそもこの話は三年ほど前から出ていた。それによると今年の冬のある日になつたら人類は滅亡するのだそうだ。どういう経緯でそうなるのかもわからない。ましてや、誰がそう予言したのかさえわからない。只、どこかの古いもう滅亡してしまつた文明の予言だそうだ。僕としては只マスコミが騒ぎ立てたからこんなに話が大きくなつたのだとしか思えない。僕の親たちの世代からすると、どうも嘘臭く感じるらしい。なぜなら、一九九九年に世界は終わらなかつたから。その証拠に、大抵の人たちは皆普通に生活している。何の変わりもなく日常生活を生きている。只、全くそのことを気にしない人はきつといないのだろうけれど。

もそもそと支度を始める。今日は彼女と出かける予定だった。が、急遽彼女がうちに来ることになったので急いで部屋を掃除する。約束の時間までになんとか片づけて、駅まで彼女を迎えて行った。

他愛もない話をしたり、音楽を聴いたり。その時間はゆっくりと流れているようで、でもとても早く感じる。彼女と合流してうちに戻ってきたのは昼前だったのに、もう時刻は夜八時を示していた。誰かと共有している時間がこんなにも楽しいと思えるのは、彼女が初めてかもしれない。

テレビを付ける。ぱらぱらと彼女がチャンネルを変えて、一通り何をやつているかを見て、そしてまた消した。

「面白くないね。最近ずっとこればかりなんだから。」

彼女は言つ。

「こればかりかり、というのはきっとカウントダウンのことだな。人類滅亡へのカウントダウン。ここ最近は、どのテレビ局もこの話題を扱つてゐる。時には面白可笑しく、時にはシリアスに。僕も彼女もこの手の面白さがいまいち理解できないので、最近はめつきりテレビを見る頻度が減つてしまつた程だ。」

「ああいう番組つて見たくない人もいると思うんだけどな。」

「きっと一番見たくないのつて妊婦さんよね。だって、自分の子供の将来が閉ざされているどんとか、将来はありませんと宣言されているようなものだもの。」

彼女は独り言のように何時もそりやつて呟く。
この日常が終わるまであと七日。

がくつ、と頬杖をついていたその手から、顎が落ちたので目が覚めた。どうやら私はうたた寝をしていたようだ。時計を見ると夕方の五時を半分ほどまわったところだった。肩には薄いタオルケットが掛けている。私が自分で掛けた覚えがないところをみると、きっと夫が気を利かせて掛けてくれたのだろう。私の身体が冷えないように。私のお腹の中にいる赤ちゃんに影響しないように。タオルケットを肩から落ちないようにして振りかえると、夫はテレビをつけっぱなしのままソファでうとうとしていた。立ち上がって、傍に近寄る。私に掛けてあつたタオルケットを今度は夫にかけてあげた。起こさないようにしたつもりだったのだが、眠りが浅かつたのか夫はどうやら起きてしまったようで、

「ああ、起きたんだおはよう。」

そう言って座り直し、私が座れる場所を空けてくれた。心遣いに感謝しつつ隣に腰をおろす。

「身体冷やしちゃ駄目だから。」

夫はそう言ってまた肩にタオルケットを掛けてくれた。

お礼を言つて、会話が途切れる。テレビの中の話し声が小さく部屋に響いていた。夫も私も、その番組に目を向ける。最近流行の力ウントダウンだった。嬉しくない、カウントダウン。別段信じている訳でもないのだが、何となく不愉快だ。なんだかともこのお腹の中の子の将来は闇に閉ざされていると言われている気がして。別に本当にそうなるわけではないと頭の片隅では思つているのだが、どうしても不安をかき立てられる。母として、自分の子供には色々な経験をしてもらいたい。自分の人生を歩んで、そして土に還つてもいいたい。それなのに、この世界に生まれてくる前に死ななければいけないなんて。そんな思いにも裏腹に、テレビでは先ほどの番組で芸人が面白可笑しくそのことをネタにしていた。耐えきれなく

なつて目を伏せる。隣の夫をちらり見ると、心配そうな瞳と目があつた。私がこの手の番組を苦手としているのを知っているのだ。

「ごめん。チャンネル変えるね。」

そう言つてリモコンに手を伸ばした。何回かチャンネルを変えていつたが時間帯の関係だろうか、どこも似たような番組をしていた。いよいよ人類が滅亡することが肯定されたような気分になつてくる。この子に将来はないのだろうか。不安な気持ちに押しつぶされそうになつて、黙つて隣の夫の手を握つた。

この不安がなくなるかもしれない日まであと六日。

はつと目が覚めた。目を開けると眩しい光が目に入つてくる。思わず目を細めて辺りを見回す。その光の正体は目の前の蛍光灯だつた。顔の下には真っ白な問題集。右手にはシャープペンシル。何故か左足だけ痺れが切れている。どれだけ寝ていたのだろうか、窓の外は既に白み始めていた。

ここ最近、あたしはベッドで寝ていらない。受験生なんてそんなもんだと自分に言いきかせてみるが、やはり机で寝るのは慣れないしかし。ぐつと背筋を伸ばして、ひとつ、大きな欠伸をする。あと数時間後にはまた学校に行かなければならない。そう考えるだけで憂鬱だがそれはもう仕方がない。気を取り直して問題集に取りかかつた。目をこすりながら、問題を読む。外では雀が鳴いている。

ふつと気付くと問題集に取りかかつてから三十分が経っていた。またあたしは寝ていたに違いない。どうやらこれ以上問題集とにらめっこしていくとも埒があかないようなので、制服に着替えて荷物を持つてリビングに向かつた。リビングではもう電気もテレビも付いていて、台所で母さんが朝ご飯の支度をしていた。

「おはよう。」

一通りの朝の挨拶をすませて、ソファに沈む。横に倒れたらそのまま眠つてしまいそうだったので、ソファの上に体育座りをしてテレビをぼーっと眺めた。働かない頭でテレビを見る。どうやら朝の情報番組のようだ。最近よく見かける綺麗な女のアナウンサーがなにやら話している。それに答えるゲストの色々な顔ぶれ。画面右上の小さな字幕を読むと、その話題は最近の人類滅亡に関する考察のようなものだつたらしい。朝っぱらから面倒くさいものを見てしまった。かといってリモコンを探すのも億劫で、そのままその番組を見る。あたしは最近テレビをあまり見ていないけれど、それでもたまに付けるテレビでは大抵この傾向の番組を放送している。きつ

と一日中じつはこの番組をやつしているのだね。そう考へると、一日中テレビを見ていなければならぬ状況じゃなくてよかつたと思う。こんな番組、ずっと見ていたら気がおかしくなつてしまいそうだ。

こんなことを言つと受験勉強があまり涉つていなければそれから逃げのようにならぬかも知れぬけれど、でも、じつは番組を見ているとあたしはいつも思うのだ。今、あたしがやつてゐることに意味はあるのかと。あたしたちにはもう夢を叶えられるような未来が与えられていないのでないかと。一生懸命勉強して勉強して志望校に合格するように、そう頑張つてゐるけれど、その前に死んでしまうのならば今やつてゐることは無意味なのではなか？ならばいつのことそれをせずに放棄して、残りの日数楽しんだ方が有意義なのではないか？こんな考へ、馬鹿らしいのは重々わかつてゐるのだが、考へずにはいられなかつた。大学だ夢だと書いていられるのは、未来があると思つてゐるからこそ。未来がないと決めつけられてゐるかのような気になつてしまえば、氣力などすぐには消えてしまうのだ。本来、人は誰だつて楽な方が好きに決まつてゐる。それなのに、どうしてその氣力を削いでしまうような事柄をわざわざ過大に報道するのか。いやもしかしたらこんなに考えすぎているのはあたしだけなのかもしれないのだが。そう考へてみると確かにあたしの友達やクラスメイト達も表向きはこの話題をネタにしている。とするとやはり世間一般の人々はこの手の番組を楽しんで見ているのか。

はつと意識をテレビに戻すともう話題は次のものへと移つて行った。画面の左上の時計に目をやる。そろそろ朝ご飯を食べないと電車に間に合わない時間になつてゐることに気付いた。重い腰を上げて食卓へ向かう。食卓には何時もと何も変わらない朝ご飯のメニューが並んでいた。

今を有意義に過ごせているのか分かるまであと五日。

「はい、お疲れ様です。十分間の休憩に入ります。」

スタッフの声に緊張感が抜ける。スポットライトで暑いスタジオから原稿を持って樂屋へと引き返す。椅子に座つて一息ついてからまた次の原稿を読み返す。自分は現在、お茶の間の皆さんに顔と名前を覚えてもらえるくらいにお仕事をさせてもらっている。そのことは本当に感謝しているのだが、どうも毎日のように人類滅亡だの地球滅亡だのという話題を話さなければならぬのは憂鬱だ。自分が受け持つこの番組を楽しみにしてくれている人もいるのだろうが、自分が話す内容によつて不愉快になつたり恐怖心を更に抱いてしまうような人が圧倒的に多いのではないかと最近は思えて仕方がない。実際、この手の話題には賛否両論あるようで、番組が始まると同時にご意見のメールなどがひつきりなしに届くのだそうだ。正直、自分は今自分がしていることが正しいかどうか判断できていないうふうに思う。否本当は正しいも何もないかも知れない。仕事は、仕事だ。そう割り切つてしまえば早い話。だがしかし、マスコミといつ現代社会に於いて多大な影響力を持つてゐる媒体の顔、と言つても過言ではないような職業に就いている身からすると、そう割り切つてしまふのはどうかとも思う。否、割り切つてはいけないようと思う。かといってどうすることも自分にはできない。只、与えられた原稿に沿つて読むことしかできない自分が情けない。

「休憩終了三分前です。そろそろスタジオにお願いします。」

考えを遮るようなスタッフの声にはつとして目を開けた。原稿を読みつつ色々考えつつ、自分は浅い眠りについていたようだ。この番組の収録はあと一時間くらいだろうか。とりあえずこれが終われば今日の仕事はもう終わりだ。座つたまま伸びをして軽い眠りに入つていた身体を起こし、憂鬱な原稿を持って再びスポットライトの光の中へと戻つた。

この仕事から解放されるまであと四日。

目を開けた。目の前には電車のホームの弱い蛍光灯の光が降り注いでいる。私にはその光さえも眩く感じる。ホームの椅子で少しだけ寝ていたようだ。時刻を確認する。そろそろ最終の電車がこの駅に止まるはずだ。

私はその電車によつて私の人生の幕を閉じることに決めている。ホームには数人の人と車掌さんが一人。終電だから、太陽が出ている間の電車よりかは人に迷惑をかけないだろう。そんな安易な考えからこの時間を選んだが私は別段後悔はしていない。私には光あふれる昼間よりも、この静かな夜の方がお似合いだ。

電車が来るまであと三分。

私は椅子から立ち上がり黄色の線の内側まで歩いていった。あたかもこの電車に乗るんですよ、という風に。露出の多い若い女の人の後ろに並んだ。

あと一分。

今日も何時もと変わらない一日だった。あと数日後には人類は滅亡するなんていう無責任な予言があるにもかかわらず、今日も一日平和だった。

あと一分。

すこし緊張してきた。だがもう私に迷いはない。ここでさようならだ。私が生きていてももう何の意味もないのだ。私が生きるその人生にもう光はない。それならばもういつそのことその無責任な予言に便乗して私はいなくなる。それはなんとなく人類全員で心中するような気分だ。遠くに電車のライトが見えた。もうすぐ、もうすぐこの駅に着く。

女人の横を通り過ぎた。自分で選んで着てきた私の喪服のような黒のスカートが揺れる。駅員さんはこちらに気付かない。女人も携帯電話に夢中だ。電車がホームに入ってきた。もうきっとブレ

一キをかけ始めている。停止してしまつては困る。私は小走りで電車が入つてくる方へと急いだ。そして丁度良さそなところで足を止める。電車を一回見て、くるりと電車に背を向けた。スカートがふわりと揺れる。きっと私の顔は微笑んでいるのだろう。そのまま後ろに歩いた。気付いた駅員さんがこちらに走り寄つてくるのが見える。なにやら大声で叫んでいるが私にはもづ聞こえない。

さようなら。

地面を蹴る。

さようなら、さようなら。

黒の衣装がたなびくのが心地よい。

足が、地面を離れた。

急ブレーキ音。

悲鳴、ざわめき、無音。

漆黒の夜空と美しい三日月、星の弱々しい光。この闇に吸い込まれてしまいそうだ。いやしつのこと吸い込まれてしまえ。

嗚、呼。あ。

あと、三日。

それは天気のいいお日曜日で、うたた寝をしていたときのことでした。懐かしいあなたが、夢に出てきたのです。いつだつたか若い頃、あなたとずっとといつしょにいましょうと誓つたあのときのことが。

でもあなたは年をとる前にいなくなつてしましましたね。もしもあなたが今生きていたのなら、素敵なおじいさんだったのでしょう。ほんとうなら、わたしといつしょに年をとつてほしかったわ。でももうすぐ、あなたに会えるかもしません。もうすぐ、人類は皆滅亡してしまうのだと言っているのです。もし、そうなつたら一番にあなたに会いに行きますね。わたしはおばあさんになつてしまつたけれど、あなたはわたしのことわかつてくださるのかしら。わたしのこと、覚えていらっしゃるのかしら。もし、予言が外れてもきっともうすぐ、あなたに会いに行けますから。少しだけ待つていてくださいね。あなたは、あのときのまま、若いおすがたのままなのでしょうか。早く、お日日にかかりたいです。

ねえ。はやく、はやく、あなたに。
愛しいあなたの再会まであと一日前。

明日、彼女は朝が早いらしいので目覚ましをセットした。手近な机の上に時計を置いて布団に潜る。果たして、本当に僕たちは明日の朝を迎えることができるのだろうか。例えば今日の深夜十二時になつたら、突然何かが起こつて人類は滅亡するのだろうか。はたまた、明後日になる前の夜の十一時五十九分に何かが起ころるのだろうか。それとも、やはりあの話は嘘で何事もなかつたかのように明日は過ぎていくのだろうか。僕には全く見当もつかないし、仮に明日には自分が死んでいるのだとしても全く実感がわからない。そもそも死ぬと言つことはどういうことなのだろうなどと、今まで考えないように避けてきたことまで考へ始める始末だ。頭の中がぐるぐるとまわっている感覚。ある一定の自分なりの結論まで達すると、いつものごとく全身を恐怖が襲つた。こうなると何故か無性に人肌が恋しくなる。嗚呼、眠れなくなってしまった。

思わず、隣の彼女を抱き寄せた。自分の物ではない暖かな体温に少しばかり安心する。眠つていると思っていた彼女は、いつの間にか目を開けて此方を見ていた。目が合つ。彼女は何も言わずに僕の背中に腕を回した。言葉が無くても心は通じるなんて、そんなことは信じていない。だけどこの瞬間だけは、それを信じてみる気になつた。何も言わない彼女も、本当は怖がついているのだろうかなどと考えてみると、でもやはり本当のところなんて本人に聞いてみないと分からぬのだが。

彼女の視線が外れる。自然とその外れた視線の先を目で追う。彼女は時計を見ていた。時計が示すのは十一時五十五分。いよいよ、明日になる。あれだけ嫌だつたカウントダウンの終わりが近づく。きっと今も、テレビを付けねばまるで年越しのカウントダウンのように盛大にそれが放送されているのだろう。でも僕たちはテレビはつけない。見ない。見たくない。少なくとも僕は最期になるかもし

れないこの瞬間を彼女と過ごしていることを誰にも邪魔されたくないなかつた。僕にとって彼女がほんとうに大切な人だつたらしいことを、皮肉にもこの予言のお陰で気付かされてしまった。

彼女が時計から視線を戻して、またもそれを追うように僕も戻す。今度はさつきよりも近くで目が合つ。彼女に僕の心の内を全て、見透かされてしまつているような気持ちになる。でもそれは不愉快ではなかつた。むしろ、幸せなことだとさえ思えた。自然と僕の、彼女を抱きしめる腕に力が入る。彼女の鼓動が僕の身体に伝わってくる。きっと、僕の鼓動も彼女の身体に伝わっている。嗚呼、僕たちは生きているんだ。不意にそう思った。

彼女も応えるように腕に力を入れる。時計はもう見えない。後何分で明日になるかも分からない。否もしかしたらもう明日になつているのかもしぬない。でももうそんなことはどうでもよくなつていた。僕の恐怖はとっくの昔に消えていて。僕は最期かもしれないこの瞬間に彼女と居られたことが幸せだ。

他の人がどう今までの日々を過ごしていたかは分からぬ。けれど、僕はこうやって今日この日まで生きてきたことが幸福に思える。僕が生まれて、彼女が生まれて。たくさんの人と出会つて、たくさんの人と関わつた。成長して、自立して。彼女と出会いつて、恋をして。いろいろなものを見た。いろいろなものに影響を受けた。やり残していることも、後悔していることもたくさんあるというのに、今はこれまでの全てに感謝していく。嫌なことを全て綺麗に水に流してしまつたように、せっぱりとした気持ちになつた。これはもしかしたら、自分が死ぬときの理想的な感情なのかもしれない。今まで出会つたいろいろな人にありがとうと、今なら言える気がする。否、言えると断言しよう。

暖かい。僕はきっと、この腕の中の彼女に一番感謝すべきなのだろう。こんな気持ちにさせてくれて。僕と出会つてくれて。僕を選んでくれて。ありがとう。

「もうすぐ、だね
彼女は僕を見て微笑んだ。
つづく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7679o/>

終わらない物語

2011年10月8日05時05分発行